　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　２０１８．６．１７

大草

第○章　日本人の倫理意識への仏教の影響

　　　　～戒律、八正道、経典、因果応報、輪廻転生、仏教由来の言葉について～

目次

１．はじめに

２．仏教の戒律

　2.1　五戒

　2.2　十重禁戒

　2.3　六波羅蜜

３．八正道

４．経典

５．因果応報の思想

６．輪廻転生の思想

７．仏教由来の言葉

８．まとめ

１．はじめに

仏教は、日本人の日常生活に大きな影響を及ぼしている。仏教は、悟りを開き現世の苦しみ・煩悩から解脱することを目的とした宗教であり、厭世主義、空の思想、神秘主義、本学思想（ありのままでよいとする思想）などからなっているため、倫理性を含まないと考える仏教学者が多い。しかし、仏教に倫理性が含まれているとする学者もいる（注[[1]](#footnote-1)）。筆者は、幼少期からの四国八十八ヶ所巡礼のお遍路さんとの接触や真言宗の各種法事の体験から、仏教には勧善懲悪などの倫理性が強く含まれていると考えている。また、仏教に倫理性が含まれていることは、仏教用語である「諸悪莫作（しょあくまくさ）、衆善奉行」（悪いことはしない、善いことをしようという意味）からも明らかといえよう。

　本稿では、仏教の倫理性を示していると考えられる論点のうち次の５点について考察したい。第1に仏教の戒律に含まれている倫理性を考察する。第2に八正道（釈迦の教え）に含まれる倫理性を取り上げる。第3に経典を取り上げ、第4に因果応報の思想を取り上げ、第5に輪廻転生（りんねてんしょう）の思想を取り上げる、これらを通じて、仏教のどのような倫理が現代日本人の倫理意識に影響を与えているのかを明らかにしたい。

さらに、仏教由来の言葉を取り上げることにより、仏教がいかに日本人の心や日本の文化に溶け込んでいるかを見てみることにする。

２．仏教の戒律

　仏教には、五戒、十重禁戒、六波羅蜜、八正道など釈迦の教えとして守るべき規律や考え方がある。これらの規律や考え方は、本来出家僧侶に適用されるものであった。五戒、十重禁戒、六波羅蜜などの規律は戒律と呼ばれており、その内容を検討すれば倫理性と関係があることは明らかである。むしろ、仏教は、人々に倫理や道徳を教える宗教であるということができよう。戒律は、もともと僧侶を対象にしていた規律であったが、大乗仏教においては、その戒律が信者や一般人にも適用されるようになった。

2.1　五戒（注[[2]](#footnote-2)）

　仏教における最も根本的な戒律は、五戒という戒律である。これは、基本的な戒律であり、①不殺生、②不偸盗（ふちゅうとう）、③不邪淫、④不妄語、⑤不飲酒（ふおんじゅ）の五戒である。

2.1.1　不殺生

第一は不殺生である。これは、この世のありとあらゆる生命ある存在を殺してはならないという戒律ではない。有情（感情などの心を持つ）の動物の殺生を禁じたものであり、輪廻転生の思想から導き出された戒律である。自分の親が亡くなったあと、人間以外の動物に生まれ変わっていることもあると考えられ、動物を殺すことは親を殺すことになり兼ねないため禁じられたものである。従って植物は不殺生のこの戒律の対象外である（注[[3]](#footnote-3)）。この戒律の関連で、肉食について触れておく。初期の仏教では托鉢でもらった食べ物は何でも食べるというのが原則であり、肉食も禁じられてはいなかった。しかし上座仏教では、輪廻転生の思想から、三種浄肉（自分のために殺された肉でないこと、その恐れのない肉、屠殺を目撃してない肉の３種類の肉）は食べてもよいが、それ以外は禁止とされている。大乗仏教では、同じく輪廻転生思想から、肉食は殺生と不可分の関係にあるため、一切の肉食を禁止している宗派もある。

2.1.2　不偸盗

　これは他人の物を盗んではいけないという戒律である。仏教では、物は宇宙の持ち物であり、個人の無所有を説いている。即ち、物を所有するということは、宇宙の物を我が物として盗んでくることであり、決して自分で所有していることではないとされている。資本主義の世界では、人や法人が物を所有する形をとっているが、これは社会の経済を発展させ、人々の生活をよくするための方便にすぎないと解釈されている。本来、物は宇宙の所有物であり、私的な所有は認められておらず、物の所有者は皆盗人と考えられる。物を所有する人間は原罪とでも言うべき罪を犯していることになる。なお、この戒律には、困っている人には積極的に物を布施することが含まれている。大変深遠な思想から導き出された戒律であるといわれている。

2.1.3　不邪淫

　これは、異性と接することを禁じたものであり、僧侶に求められる戒律（具足戒）であるが、一般信者や一般人に対しては、道理の通らない異性との接触を禁じたものである。結婚に伴う異性との接触は邪淫ではないため許される。邪淫は愛情や信頼を裏切る行為であるため禁止されている。

この戒律が定められた理由は、以下の二つである。①異性と接することは修行の妨げとなること②出家し僧侶集団に入るためには、成人した本人の自発的意思が必要であるとされたが、僧侶集団の中で生まれ育った場合は、この自発的意思を持つことができないため、僧侶集団の中に子供が生まれることを避ける必要があった。

この基本的な戒律は僧侶の間では水面下で破られており、僧侶が妻帯し僧籍も世襲制をとることが多数行われてきた。僧侶に関しては信者や一般人と異なり、厳しくこの戒律を守らせるべきであったと考えるが、人間の生理現象の一部であるため、そうはならなかった。なお、明治5年（1873年）太政官布告により、僧侶の肉食妻帯が自由にできることとなった。（但し、浄土真宗系の宗教では、それ以前から肉食妻帯も認められていた。）

2.1.4　不妄語

　これは、嘘をついてはならないということである。これは説明を要しない基本的な倫理であるが守るのは大変難しい。嘘をつくことは、自分自身を欺いていることになり自分の心を汚しているといえる。「自らその心を浄める」というのが仏教の修行の一つであるが、これに反する行為である。一方でガンを告知しない場合などがある。これも嘘をついたことになりこの不妄語戒の違反であると言わざるを得ない。結果がよかったからといって戒律違反が許されるものではない。しかし「嘘も方便」という現実的な問題解決も正当化できる場面もある。この場合は緊急避難と同様の考え方でこの戒律には違反するが、仏教において許されてきたと解すべきであると思う。

2.1.5　不飲酒

　これは、酒を飲んではいけないという戒律である。酒を売ってはならないとの説もある。酒を好む僧侶も多く、戒律に背かないように酒を般若湯という湯としてとか、薬と称して飲むという形をとってきた。さらに、この戒律は正気を失うほどの大量飲酒を禁じたもので、多少の飲酒は許されるというように融通無碍に解釈されて戒律は守られてこなかった。（日本仏教において戒律は、時代によって、人によって様々に解釈されてきた。いろいろな手段により戒律を必ずしも守らなくてもよいとする現実があった。これは、規律を守らなくてもよいとするものであり、また戒律を守らなくても許される場合があるなどの曖昧さを受け入れることに起因するものであり、これらは日本文化の一つの特徴といえよう。）

2.2　十重禁戒

　僧侶には、十重禁戒が課されている。そのうち五戒については上記の五戒とおなじである（十重禁戒は、天台宗の戒律であるが、真言宗では同様なものに十善戒（注[[4]](#footnote-4)）がある）。残りの五戒は次の通りである。

①不悪口（ふあっこう）戒は、僧侶の悪口を言ってはいけないという戒律である。

②不両舌（ふりょうぜつ）戒は、自分をほめて、他人を謗ってはいけないという戒律である。

③不綺語（ふきご）戒は、貪ってはならず、また物惜しみしてはいけないという戒律である。

④無瞋（むしん）戒は、憤ったり、怒ってはならないという戒律である。

⑤不謗三宝（ふほうさんぽう）戒は、三宝（仏・法・僧）を謗ってはならないという戒律である。

　これらを入れて男僧には２５０戒、尼僧には３４８戒がある。

　仏教には、様々な戒律があるが、戒律を厳しく守るという原理主義的な宗派もあるが、日本仏教では戒律は破られても仕方がないということを前提にしているような曖昧さが感じられる。日本人の寛容な民族としての一面でもあるといえよう。

2.3　六波羅蜜

　仏教の教えに、六波羅蜜がある。波羅蜜は、サンスクリット語のパーラミター（さとりに至ること）の漢音の当て字である。六波羅蜜とは、修行者が悟りを開くために行うべき六つの徳目のことであるが、一般人にも勧められている徳目でもある。

六つの徳目は、以下の通りである。

①布施=物惜しみすることなく、他者に施しをすること

②持戒（じかい）=戒律を守り、反省をすること

③忍辱（にんにく）=苦難に耐え忍ぶこと

④精進=努力すること

⑤禅定（ぜんじょう）=心を安定させること

⑥智慧=何事にも惑わされない真実の智慧をもつこと

その内容には倫理と道徳が含まれており、誰もがそれらを実践することにより、人間の倫理性が高まり暮らしやすく犯罪の少ない社会づくりが促進されると思われる。この六波羅蜜も日本人の倫理性や道徳観によい影響を与え、健全な社会づくりに貢献してきたといえる。

　五戒と十重禁戒は、「○○をしてはならない」との否定形の道徳であるが、六波羅蜜は、「○○をしなさい」との肯定形の道徳である点にその特徴がある。

３．八正道

　仏教では、涅槃（ねはん）（注[[5]](#footnote-5)）に至るための正しい方法=八正道が説かれている。八正道とは、以下の通りである。

①第一に正見（正しく無常を観察すること）

②第二に正思惟（正しい考えを持つこと）

③第三に正語（正しい言葉をもつこと）

④第四に正業（正しい行いをすること）

⑤第五に正命（正しい生活をすること）

⑥第六に正精進（正しい努力をすること）

⑦第七に正念（正しくとどめること）

⑧第八に正定（正しい集中力を完成させること）

この八項目の正道を実践すれば、無事涅槃に到達できるとされている。この八正道は、我々日本人の行動に少なからず影響を与えてきたものと考えられる。これらの八正道は、特に「八正道」として教育を受けたわけではないが、幼少期から日常的に言われてきた教えであり、我々日本人の価値判断の基本となっている。このような価値判断基準は、現代においても少しも衰えることなく、その倫理性を保っていると考える。

　但し、この八正道により涅槃に到達するためには、困難な修行が必要とされており、庶民には手の届かないものであった。これを解決したのが平安時代末期から鎌倉時代にかけて教えを説いた法然や親鸞などである。この経緯は、次の通りである。

　仏教が日本に伝来したとき、仏教は、鎮護国家を目的として大和朝廷に政治的に採用され、国家に平和と繁栄をもたらすものと考えられた。しかし、平安時代末期には、戦乱などの政治の混乱や天変地異、疫病の蔓延などにより人心が乱れ、仏教により国を治めることが困難となり、末法思想（注[[6]](#footnote-6)）も広がった。このような時代背景の中で、仏教による個人の救済が法然や親鸞等により説かれ、鎮護国家から個人救済へと仏教の質的転換がなされたのである（注[[7]](#footnote-7)）。

４．経典

　インドで生まれ発展した仏教は、中国、朝鮮半島を経由して日本に伝道されたが、その大元になるのが経典である。何千巻もある経典をすべて読むことは至難の技であるが、代表的な経典とその要約は一般人でも読むことが可能である。経典は大きく次の三つに分類される。

　①　経：

経とは、一般に「お経」と呼ばれているもので、釈迦の教えをまとめたものである。

　②　律：

律とは、仏教徒の行動規範（いわゆる戒律）である。

　③　論：

論とは、経や律を研究し、注釈をしたものである。

　経典の分類としては、小乗経典と大乗経典の２種類がある。

小乗経典は釈迦が直接弟子に説いた教えをまとめた原始仏教の経典であり『阿含経』と呼ばれる。阿含経は数千に及ぶ経典の総称であり、『長阿含経』『増一阿含経』などがある。

大乗教典は釈迦の教えを大衆に広めるための経典である。顕教の経典として『般若心経』『法華経』『華厳経』などがあり、密教経典として『大日経』『金剛頂経』などがある。般若心経は、大乗経典のエッセンスをまとめたもので、２６７文字で構成されている。仏教の神髄を伝える経典であり、あるがままに過去と未来を受け入れ、煩悩や執着心を捨て、苦のないさとりの境地に至る道が示されている。

「法華経」は、天台宗、日蓮宗が重んじる経典であり、自分だけの快楽や幸福を願うのではなく他者と共に喜び共に共感する心が菩薩の心であると説かれている。全28巻であり多くの比喩話から構成されている。法華経七喩（火宅の喩、窮子の喩、薬草の喩、化城の喩、衣珠の喩、髻珠（けいじゅ）の喩、医子の喩）が有名といわれている。これらの例え話を通して、宇宙の真理（調和）、久遠の成仏、人間に仏性があることなどの仏教の思想が説かれている。この「法華経」は、釈迦が最後に説いた教えである。

「無量寿経」（浄土宗、浄土真宗、時宗が重んじる経典）においては、結願とか本願というのは、仏に対して自分が約束することであり、極楽往生を願う人には専ら念仏を唱える称名念仏が大切であると説かれている。

これらの経典に、以下の仏教思想が含まれている。

①人生は苦であり、その苦の原因は煩悩にある。

②四法印（注[[8]](#footnote-8)）。

④４つの真理（注[[9]](#footnote-9)）。

⑤八正道（さとりの境地に至るための正しい八つの道）

⑥因果応報（後掲）

⑦輪廻転生（後掲）

これらの仏教思想は、現代の日本人にも様々な影響を与えている。仏教は、人生を苦ととらえて、苦からの脱却を説く。また、因果応報と輪廻転生の思想は、現在も生きている。「悪事を行えば地獄に落ちる」とか、「ご冥福を祈る」とか、「あの世に旅立ち苦から永遠に解放される」というのはその表れと思われる。また、「情けは人のためならず」、「生まれを問うな、行為を問え」、「他力本願」、「一切皆空」なども経典から導かれた内容である。

経典は、仏教を構成する三大基本要素（仏、法、僧）のうち、法にあたるものであり、数多くの倫理的な内容を含んでいる。現代日本人の日常生活において、経典に直接触れることはほとんどない。しかし、経典に根源がある言葉には常に触れており、それらに含まれる倫理性を意識しており、各人の行動に影響を与えていることが分かる。

５．因果応報の思想

仏教の重要な教えの一つに因果応報の思想がある。簡単にいうとよい行いをすればよい来世を迎えることができ、悪い行いをすれば地獄に落ちるということである。そのような因果応報が生じるための前提は、死後の世界が存在することとその死後の世界を永遠に巡るという輪廻転生の存在である。現代日本人で、死後の世界があると信じている人は少ない為、この因果応報の思想は現代日本人にそぐわないものとなっている。しかし、悪行をすれば幸せな死に方をしないとか、悪行の報いがあるはずだとか、情けは人のためならずとか、よいことをすれば報われると信じている人は多く、この思想が脈々と日本人の心のうちに残っているといえよう。

６．輪廻転生の思想

　死後の世界は存在し、その世界は６つの世界（道）があるとされている。

①天道：天上界にあり、苦がなく楽の多い世界である。

②人道：生、老、病、死、怨憎会苦（おんぞうえく：イヤな人と会う苦しみ）、愛別離苦（愛する人と別れる苦しみ）、求不得苦（ぐふとっく：求めても得られない苦しみ）、五取蘊苦=五蘊盛苦（ごしゅうんく=ごうんじょうく：持てる者の苦しみ）の四苦八苦のある世界である。

③修羅道：怒りのままに争いを繰り返す世界である。

④畜生道：弱肉強食が繰り返され、互いに殺し合い、自分だけが生き残ろうとする世界である。

⑤餓鬼道：欲望の塊の世界である。

⑥地獄道：あらゆる苦しみを受け、６つの世界の中で一番苦しみの多い世界である。

輪廻転生の思想では、生前の行いの善悪によりこれら６つの世界を永遠に巡るとされる。生前の行いが因となり、死後に行く世界が果として決まるというものである。この輪廻を脱却し、極楽浄土に往生するというのが、いわゆる「さとり」による往生なのである。仏教の教義は奥深く単純なものではないが、骨格は上記のようなものである。

ここで重要なのは、このような因果応報と輪廻転生の思想が現代の日本人の倫理意識に影響を与えているのか、影響を与えている場合にはどのような影響をあたえているのかということである。この点について、言及された書物の一つに、『文化史論―ベネディクト「菊と刀」を読む』（副田義也1993年p.288）がある。この中に、「仏教の影響力が日本の民衆に広く浸透したとはいいがたいが、その教義のうちの罪業観は最も徹底して受容された。仏教渡来以前の日本の固有信仰のなかにも霊魂の転移、すなわち生まれかわりの思想があり、これによって仏教の輪廻転生の教理は定着しやすかった。」「つまり、罪の報いを恐れることを教えたのである。これは、この世の悩み、苦しみは、前の生でのわが霊魂の罪業のせいであるという考え方になり日本人のあきらめのよさともなった」とあり、因果応報と輪廻転生の思想が受容されてきたことを示している。

また同書に、「鎌倉時代に入り、日本的仏教が形成されてはじめて日本人は霊性（宗教意識のこと）の生活にめざめる。」とあり、前世でどのような罪があって現世のこのような身分になったのか、あの世で助かることができるのかといった心配をするようになったことが取り上げられている。これなども因果応報、輪廻転生を信じてきた日本人の姿を示している。

仏教における輪廻転生の教理により、罪の報いを恐れる思想が日本人の心のうちに残っているといえる。親の因果が子に報いとか、前世の悪行が今の自分の不幸や罪の原因となっているとか、悪いことすると地獄に落ちるとかいわれることに代表されよう。そしてこれらの罪から逃れるために神仏を拝むという行為に日本人の倫理意識が出ているということができると考える。

７．仏教由来の言葉

　日本語の中に、仏教由来の言葉が使われ現在も脈々と生きている言葉が数多くある。それらの仏教由来の言葉のうち、日本人の倫理性や道徳に関係する言葉をいくつか例示し、日本人の心や日本の文化に仏教が影響を与えていることを見ることにする。

　①後生大事：

意味は、お願いだからという意味で使われている。もともとは、後生というのは死後の世界のことを示しており、自分の命をかけてお願いをするということである。死後、大事なことは西方浄土に往生することであり、そのために現世で倫理や道徳に反しない生き方をすることを奨励しているのである。

　②三途の川：

死後にどのような世界に行くにしても冥途の入り口にある三途の川を渡らねばならない。三途の川には流れの異なる三本の川があり、どの川を渡るかは、生前の行いによって決まるとされている。生前の行いは、全てこの渡河前に暴かれるため、生前に悪事を慎み、功徳を積むことが求められている。

　③自業自得：

悪行悪果、善行善果をさし、因果応報の思想を示す言葉である。自らの行いを正しくすることが期待されている。

　④悉有仏性（しつうぶっしょう）：

この世に生きているものは皆生まれながらに仏になる可能性を秘めているということを示す言葉である。「山川草木悉皆仏性」という言葉もあり、この場合は生物だけでなく非生物にまで仏になる可能性を広げたもの。放射能汚染や公害などで環境を破壊することを避けることも含まれると解釈されており、万物を大切にして慈しむことが説かれている。

　⑤少欲知足：

欲望は煩悩であり、限りがない。大切なことは、足りることを知ることである。欲望のままに生きては身の破滅を招くことを諭した言葉である。

　⑥諸行無常：

万物は変化するのであり、常住のものはない事を諭している。仏教の基本的な教えであり、四宝印（一切皆苦、諸行無常、諸法無我、涅槃寂静）の一つ。人生は、移ろいやすいものであり、今を大切にして悔いのないように生きて行くことを諭している。

　⑦慈悲：

慈はいつくしむこと、悲はあわれむことである。仏教の基本思想である「楽を与え、苦を抜くこと」を示している言葉である。人には上下関係はなく平等であり、お互いに慈悲の心を持って接することが期待されている。

　⑧八大地獄：

人は生前の行いによって、死後にどの世界（六道：天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄）に行くかが決まるとされている。悪行を働くと地獄に落ちるとされており、生前に悪行を慎むよう警告している。

　⑨不惜身命：

修行者は、人を救うためには身命を惜しんではならないという教えである。よりよく生きるためには、世のため人のために身命を惜しまず何かをすることが大切であるとの教えである。

　⑩輪廻転生（りんねてんしょう）：

人間は、生前の生き方次第で死後に六道のうちどの世界に生まれ変わるかが決まるという思想である。生前に悪行を慎み、善行を勧める思想でもある。この輪廻転生の世界から「解脱」するためには、悟りを開き仏になることであるとされている。

８．まとめ

　以上、検討してきたように日本人の倫理意識の中には、仏教の教えが入り込んできており、意識しないうちに仏教倫理に適う言動をとるような行動パターンが出来上がっているのではないだろうか。無意識のうちに倫理的な行動をとってきているのである。

　この表れが、大地震発生時の給水を並んで秩序正しく受けたり、壊れた家屋の財貨を盗まないことや、拾得物を交番に届けたり、飲食後の片付けなどの行為に見られると考えられる。日本人の倫理意識の深層には、仏教の教えが潜んでいるといえるのではないか。これまで見てきたように現代においても、日本人の倫理意識に仏教倫理が強く生き残っており、コンプライアンス違反行為に対するブレーキ役を果たしていると考えられる。

　なお、仏教の倫理性の肯定的な面をこれまで述べたが、倫理への否定的な臆面もある。

例えば、本覚思想はあるがままの現状を肯定することを基本とする思想であり、各種の差別を認めてしまうことに繋がりかねない。また仏教の寛容の精神は、倫理に反する行為などを止むを得ないとして赦してしまうことが考えられる。この論考では、仏教の倫理性に対する好影響を論ずるという本稿の趣旨に照らし、そのマイナス面については取り上げなかったことを注記しておきたい。

　終わりに、仏教は深遠かつ難解であり、筆者の仏教に対する理解不足のため、完全な記述になっていない点が多々あり得るが、ご寛恕願いたい。今後、仏教の研究を深めていき間違いのないものにして行きたいと考えている。

以上

1. 島園進「日本仏教の社会倫理」p.247～248。『末木（文美士）の仏教倫理の理解はやや極端なものだが、近代仏教学の原始仏教理解、また浄土教や禅の倫理の理解としてはそれほど変わったものではない。仏教からは世俗社会と積極的に関わるような倫理性は出てこないとするものだ。これに対して、大乗仏教で顕著となる慈悲の理念を仏教の倫理性の基盤にしようとする考え方もあるが、その意識を筋道立てて論ずる仏教学者は少ない。仏教の倫理性についての末木の理解は「超・倫理」というような理解しにくい概念を持ち出してくる新しさはあるが、実は仏教の倫理性を軽んじてきた近代仏教学の伝統に則ったものと言えるだろう。』『サンガは単に修行者のためにあるのではなく、社会に正法を行き渡らせ、平安な生活を導くという社会倫理的意義をもっている。』 [↑](#footnote-ref-1)
2. 五戒については、平川彰「生活の中の仏教」（1966年）p11～に詳細がよく説明されている。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 但し、天台宗などでは「山川草木悉皆成仏」という考え方をとり、植物や山川まで仏性を有するとする考え方もある。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 十善戒は、不殺生・不偸盗・不邪淫の身体に関する三つの戒と不妄語・不両舌・不悪口・不綺語の口に関する四つの戒と不貪欲・不瞋恚・正見の意に関する三つの戒をいう。十善戒と十重禁戒では、若干の差異がある。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 涅槃とは、煩悩を滅して智慧を完成させた「さとり」の境地のことをいう。また、肉体の死をさすこともある。 [↑](#footnote-ref-5)
6. 末法思想は、釈迦入滅後、正しい教え（正法）は1000年間守られるが、その後は教えだけが残り、どのように修行しても悟りを得ることが不可能となる末法の時代に入るとされ、その末法の開始を1052年とする考えである。 [↑](#footnote-ref-6)
7. 島園進「日本仏教の社会倫理」p.55～56。『仏教の正法理念が政権にとってさほど重要な意義をもたなくなることと、サンガ（※）が統一体としての権威を維持できなくなることに関わりがある。平安時代末期の日本ではすでにそのような事態が生じており、だからこそ法然の断固たる宗派主義の宣言が強烈な衝撃をもたらしたのだ。そもそも浄土教が優位を占めることと政権が仏教に距離をとることは相関関係にある。法然は国家社会での「正法」の支配を目指す仏教から、国家社会はさておき、とにかく個人の極楽往生を目指す仏教への転換をラディカルに主張した。日本仏教史において、この転換がもった意味を「正法」理念に注目しつつ捉えなおす必要がある。』

   （※）サンガとは、僧伽のことであり僧侶集団をさす。 [↑](#footnote-ref-7)
8. 四法印とは、釈迦がさとりを得た内容のうち、①一切皆苦（人生は苦である）、②諸行無常（すべてのものは変化する）、③諸法無我（いかなる存在も永遠不変の本質をもたない）、④涅槃寂静（ねはんじゃくじょう：迷妄の消えたさとりの境地は静かで安らいでいる）をいう。 [↑](#footnote-ref-8)
9. ４つの真理とは、釈迦がさとりを得た内容のうち、①苦諦（（人生は苦であること）、②集諦（じったい：苦の原因は妄執（渇愛）である）、③滅諦（妄執を制御するとさとりの境地にいたる）、④道諦（さとりへの道は、八正道を実践すること）をいう。 [↑](#footnote-ref-9)